

アモス書7章14-15節 「羊飼いを預言者にする召し」

1A 主の仕え人となるご計画 14

1B 神が贖われた目的

2B 何でもない人を用いられる方

1C 人を用いることを選ばれた神

2C 同じような人間

2A 人の誤った見方

1B 自分に能力があるとする見せかけ

2B 神に仕える資格がないという決めつけ

3B 「できた」人間しか用いないという考え

4B 召しへの従順

3A 神の召しに付与する力

4A 今の仕事と神の召し 15

1B 今の仕事に留まる必要

2B 仕事の中で呼び出される主

5A 神の御民を愛する心

本文

アモス書7章を開いてください、私たちの聖書の学びはアモス書の最後に入ります。午後礼拝で7章から9章まで読みます。今朝は7章14-15節に注目します。「14 アモスはアマツヤに答えて言った。「私は預言者ではなかった。預言者の仲間でもなかった。私は牧者であり、いちじく桑の木を栽培していた。15ところが、主は群れを追っていた私をとり、主は私に仰せられた。『行って、わたしの民イスラエルに預言せよ。』と。」

アモス書を見ていくに当たって、アモスが二つの点で、言い方を敢えて悪くすると「違和感のある預言者」であることをご紹介しました。一つは、彼はテコアという南ユダ王国の片田舎出身の人間であったということです。祭司アマツヤが、「ユダの地へ逃げて行け。」と言っていますが、北イスラエルの人間ではないのに、余計なことをするな、ということです。そしてもう一つは、ここでアモスが言っているように、羊飼いだっただけのことです。牧者、羊飼いであったのに、羊の群れを追っている時に主が彼を取り、ご自分の民イスラエルに預言せよと仰せになったのです。私たちは、アモスが神に召されて、神に仕えるようになったところから、神に召されることについて学んでいきたいと思えます。

1A 主の仕え人となるご計画 14

1B 神が贖われた目的

神は、人を救うご計画をお持ちです。罪によって損なわれた神のかたちを回復するために、罪によって死んだ者たちを、キリストにあって生かす働きを今も行なわれております。しかし、神が私たちを贖われる目的は何でしょうか？アダムが罪を犯す前に、彼は働いていました。エデンの園において土地を耕すものでした。今でこそ、アダムが罪を犯したため、汗水流して働かなければいけません。罪を犯す前は、労働するということは神のかたちに造られたものとして、ふさわしいことだったのです。

神がキリストによって私たちを救われたのは、私たちがただ座って、教会の椅子を埋めるためではありません。天国へのチケットを先行予約して、後はテレビでも見て、趣味にいそしんで、残りの人生を歩むために救われたものではありません。「良い行ないをするため」に救われました。「エペソ 2:8,10 あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。…私たちは神の作品であって、良い行ないをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行ないに歩むように、その良い行ないをもあらかじめ備えてくださったのです。」良い行ないをするために、救っていただきました。そして神の作品と呼ばれていますが、それは神の詩的表現とでも言いましょうか、良い行ないによって、神の詠み上げられる詩、ポエムを私たちによって書いて行かれるということです。ですから、主は、私たちが、この地上においても、そして後に来る御国においても、ご自身に仕えて、人々にご自身の恵みを満ちあふれさせるように召しておられるのです。みなさんが、自分が救われているという確信を持っていられるのであれば、神はあなたを用いて、人にご自分の救いをもたらしたいと願われていることを知らないといけません。

2B 何でもない人を用いられる方

1C 人を用いることを選ばれた神

ところで、主はご自分の働きを前進させるために、人を用いられます。けれども、ご自身でその働きをすることは当然、できます。人の助けを借りる必要はありません。大患難時代、イエスを信じる聖徒たちが全員、殺されて殉教する中で、誰も福音を宣べ伝える人がいない中でも、御使いによって福音を宣べ伝えさせます。「黙示 14:6-7 また私は、もうひとりの御使いが中天を飛ぶのを見た。彼は、地上に住む人々、すなわち、あらゆる国民、部族、国語、民族に宣べ伝えるために、永遠の福音を携えていた。彼は大声で言った。「神を恐れ、神をあがめよ。神のさばきの時が来たからである。天と地と海と水の源を創造した方を拝め。」

では、なぜ人間を神は用いられるのでしょうか？できそこないの人間を用いないほうが、完全な神が完全な方法でみわざを行われたほうが、効率が良いのではないか？と思われるかもしれませんが、しかし、その考えは神の御心を大いに損ないます。なぜなら、神はご自分の恵みの栄光を

現したいからです。恵みとは、「受けるに値しない者が祝福を受けること」です。出来損ないの人間が、神に用いられるからこそ、神が恵み深いことが人々に明らかにされるのです。パウロは、コリントにある教会に対して、「神はみこころによって、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救おうと定められたのです。(1コリント 1:21)」と言いました。愚かな方法を敢えて神は選ばれました。そうすることによって、賢いと思っている者が神の知恵の前では愚かであることを知るためである、ということです。力のある者が、神の前では無力であると知るためです。そしてこうも言っています。「1:27-28 しかし神は、知恵ある者はずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者はずかしめるために、この世の弱い者を選ばれたのです。また、この世の取るに足りない者や見下されている者を、神は選ばれました。すなわち、有るものをない者のようにするため、無に等しいものを選ばれたのです。」

2C 同じような人間

ですから、主は注意深く、ご自分が用いられる者たちを、「同じような人間」として紹介しています。アモスがその一人です。「私は預言者ではなかった。預言者の仲間でもなかった。私は牧者であり、いちじく桑の木を栽培していた。」と言っています。そしてヤコブ書において、預言者エリヤについての説明があります。三年半、雨を降らせなかった人間です。しかし、「エリヤは、私たちと同じような人間でしたが」と言っているのです(5:17)。私たちと全く同じような、普通の人間が雨を三年半降らせず、またその後雨を降らせることができた、いや、主が私たちのような人間の祈りを聞かれて、ご自分のことを行なわれるということでもあります。

2A 人の誤った見方

1B 自分に能力があるとする見せかけ

ところが、私たち人間は、神の恵みの栄光というものが分かりません。受けるに値しない者に、どうして惜しみない愛を注がれ、大いに用いることができるのか？ そんな特権を与えることができるのか？ 飛行機に乗ったことのない者が、初めての搭乗の前に、ゴールド会員しか入ることのできないラウンジで、美味しい料理を食べくつろげるような、取り扱いですから。パウロは、自分が用いられたことについて、決して自分が行なったのではないということを、注意深く話しています。「1コリント 15:9-10 私は使徒の中では最も小さい者であって、使徒と呼ばれる価値のない者です。なぜなら、私は神の教会を迫害したからです。ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。そして、私に対するこの神の恵みは、むだにはならず、私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。しかし、それは私ではなく、私にある神の恵みです。」

ところが人は、神の恵みを知ることに困難を覚えます。肉の思いがあるので、何かを行なったからそのようになるのだと思いたいのです。全く主が行なわれているのに、その用いられた時に何か自分がそれを行なったかのように見せてしまいます。自分の力や知恵で行なったのだという印象を与えて、それでそれをそのまま信じ受け入れ、鵜呑みにしてしまう人々も多くいます。それが神

の家の中でも、悲しいことに起こります。あたかも、自分は他の人よりももっと靈的である、神にもっと近いのだという印象を与えます。あるいは、あなたには神の御心が分からないだろうが、大丈夫だ。私が教えてあげよう、とか。酷い時には、あなたが捧げ物をしたら、そのようにしてあげるからという、イエス様が糾弾された、神の宮を強盗の巣にするということが起こります。

2B 神に仕える資格がないという決めつけ

その結果、私たちは「自分が何様かにならなければ、神に用いられない」と決めつけてしまうのです。自分には特別な力も知恵もないから、用いられないと決めつけるのです。アモスは、それでも神の召しに従いましたが、羊飼いであれば単なる羊飼いだと言ってしまうでしょう。いちじく桑の木を栽培していた農夫にしか過ぎないと言えるでしょう。自分は専業主婦にしか過ぎない。単なるサラリーマンだ。自分は病身だ、とか。でも、いかがでしょうか？世界に福音を伝えるのに選ばれた弟子たちは、何人かは漁師でした。何でもない漁師でした。一人は、ユダヤ人に嫌われていた、汚い仕事、ローマの犬に成り下がっていた取税人でした。そしてパウロ自身、天幕作りを職業としていました。そして過激な政党に入っていた、熱心党というユダヤ教でもテロリスト育成機関のような、やばい宗派に属していたのがシモンです。

3B 「できた」人間しか用いないという考え

できた人間しか用いられない、としたのであれば、神が大いに用いられた人物がどのように召されたかを思い出してみたらよいです。預言者にとって、口で言葉を語るのは前提条件ですね。けれども、モーセは主に対してこう言っています。「出エジプト 4:10 ああ主よ。私はことばの人ではありません。以前からそうでしたし、あなたがしもべに語られてからもそうです。私は口が重く、舌が重いのです。」そして、自分の心が言葉が清められていないといけなはずなのですが、主に招かれたイザヤはこのように言いました。「イザヤ 6:5 ああ。私は、もうだめだ。私はくちびるの汚れた者で、くちびるの汚れた民の間に住んでいる。しかも万軍の主である王を、この目で見たのだから。」ここの「ああ」は、「災いだ」という意味です。そして、ペテロはどうでしょうか？彼は漁にかけては、誇りをもっていた職人でありました。ところが夜通し網を張っても、一匹もとれませんでした。イエス様に網を降ろしてみなさいと言われて、降ろしてみたところ、大漁でした。そしてこう言います。「主よ。私のようなものから離れてください。私は、罪深い人間ですから。(ルカ 5:8)」そして、エレミヤも、テモテも、若い時に召されました。エレミヤは、「ああ、神、主よ。ご覧のとおり、私はまだ若くて、どう語っていいかわかりません。(1:6)」と言いました。テモテは、若い牧者だったので絶えず圧迫を感じて、おどおどしていましたが、「年が若いからと言って、だれにも軽く見られないようにしなさい。(1テモテ 1:12)」とパウロが励ましています。

4B 召しへの従順

だれ一人、「私は、この部分については欠けていますが、この部分で得意なのです。だから、主にお仕えすることができます。」ということはないのです。むしろ、徹底的な無力感にある

時に、主が敢えて選ばれ、呼ばれる時に、その呼びかけに従順になる、従うということでもあります。今、主に呼ばれた人々、一人一人がそうでした。モーセはその言われたことに従いました。そしてエジプトに戻りました。イザヤは、「ここに、私がおります。私を遣わしてください。(6:8)」と言いました。ペテロは、舟を陸につけると、何もかも捨てて、イエス様に従いました。エレミヤも従いました、テモテも従いました。

3A 神の召しに付与する力

主の召しに応答すれば、自分ではなく主がその者を通して働いてくださいます。自分の力ではなく、主の御霊の力、自分の知恵ではなく、キリストの知恵が与えられます。聖霊の賜物であり、また御霊による実です。イエス様が言われました。「ヨハネ 15:16 あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。それは、あなたがたが行って実を結び、そのあなたがたの実が残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものは何でも、父があなたがたにお与えになるためです。」実を結んで、その実が遺るためだとイエス様は言われています。

主は、召しに応答する者たちに対して与えられる約束は、しばしば「わたしは、あなたと共にいる」ということでした。モーセを呼び出す時に、「わたしはあなたとともにいる。これがあなたのためのしるしである。(出エジプト 3:12)」と言われました。恐れているエレミヤに対して、「彼らの顔を恐れるな。わたしはあなたとともにいて、あなたを救い出すからだ。(エレミヤ 1:8)」と言われました。ペテロには、文字通りイエス様が共におられましたね。そして、天に昇られて、弟子たちから離れられる前に、イエス様は、「父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。(ヨハネ 14:16)」と言われました。そしてもちろん、大宣教命令に従う時の約束は、「見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。(マタイ 28:20)」というものであり、マルコの福音書の最後は、「主は彼らとともに働き、みことばに伴うしるしをもって、みことばを確かなものとされた。(16:20)」とあるのです。

つまり、自分ではなく、主がして下さるということです。主が私たちの弱さの中で強くいてくださるのです。主が、命令に従う私たちと共に働いてくださって、ご自分の業を行ない、その実が残るのです。使徒パウロも、自分の働きについて、自分が行なったという意識がありませんでした。自分の働きなのですが、自分の働きではないのです。つまり、自分は用いられているかもしれないけれども、それらを行なわれたのはキリストご自身なのです。「ローマ 15:18-19 私は、キリストが異邦人を従順にならせるため、この私を用いて成し遂げてくださったこと以外に、何かを話そうなどはしません。キリストは、ことばと行ないにより、また、しるしと不思議をなす力により、さらにまた、御霊の力によって、それを成し遂げてくださいました。」

4A 今の仕事と神の召し 15

1B 今の仕事に留まる必要

ところで、神の召しについてお話する時に、必ず出て来る疑問があります。それは、「私は、今の仕事や、今のしていることを辞める必要があるのか？」ということです。それに対する答えは、明らかです。「辞めないでください。」であります。主は、自分の置かれたところからその場で召してくださいます。アモスがどうだったかを見てください。「**ところが、主は群れを追っていた私をとり、主は私に仰せられた。**」とあります。アモスは、預言者学校に行ったから預言者になったのではありません。羊飼いで、羊の群れを追っている時に預言者の召しを受け、それで預言を行なったのです。パウロも、神の召しについて、自分の置かれている状況を殊更、変える必要のないことを、コリント第一 7 章で話しています。「7:20-22 おのおの自分が召されたときの状態にとどまっていなさい。奴隷の状態で召されたのなら、それを気にしてはいけません。しかし、もし自由の身になれるなら、むしろ自由になりなさい。奴隷も、主にあって召された者は、主に属する自由人であり、同じように、自由人も、召された者はキリストに属する奴隷だからです。」

2B 仕事の中で呼び出される主

そして、自分の行なっていることを変わりなく行なっている中で、その現場で主が召されるのであれば、必ず召してくださいます。マタイが弟子となったのは、彼が取税人の台にいたときです。ペテロとヨハネが弟子となったのは、彼が漁で網を垂らした時です。そして主に召されている者が、その備えのために学校に行くこともあるでしょう。けれども、それは必須ではありません。ある人は、そのまま神学校や聖書学校に行って備える人もいます。それもまたあるでしょう。けれども、あまりにも多くの方が、今のしていることをやめて、そのようなところに行って、それで初めて神の召しを確かにすることが出来ると思っています。いいえ、今、そこにいて、主に仕え、その中で神が語られて、その語られたことに従順になるということです。

5A 神の御民を愛する心

そして、神の召しにある心があります。「**行って、わたしの民イスラエルに預言せよ。**」とアモスに言われました。民は既に神を捨てていました。異なる神々に走っていました。それにもかかわらず、彼らのことを「**わたしの民**」と呼ばれています。主が言われました、「ルカ 19:10 人の子は、失われた人を捜して救うために来たのです。」失われている魂を捜すという愛に駆り立てられます。もし、その人が他の異なる動機を持っているのであれば、それは召されていると言えないでしょう。主に用いられるとは、失われている者たちを捜す愛です。その人々に届きたいという思いです。パウロも、「新共同訳 2コリント 5:14 なぜなら、キリストの愛がわたしたちを駆り立てているからです。」と言いました。